

盆栽の図像学

第三十一回

三代 歌川豊国

《誹諧七福神之内 毘沙門》

解説／田口文哉

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

比べて読み解く

一枚の絵は多くの事柄を語る。私たちはこの連載を通してそれを体験してきた。日常の光景を借りて描かれた絵のそれぞれの図像には、その背後に当時の人たちが共有していた意味が隠されている。そうした共有の知識をもとに、各図像の関係性を想像してはじめて、絵の本当の意味を受け手は読み解いているのである。現代の私たちに失われたそうした知識を、いまは少しずつ勉強しながら見ることが、私たちも絵の生きた場所にとり着くことができるのである。

謎のある絵を読み解くためには、ヒントになりそうな他の絵や文章と比較しながら見ていくとよい。比較することで、それぞれに共通していることや、些細な違いが明らかとなり、それが大きな読み解きにつながっていく。今月の一枚は、そのように比較することで絵師がほどこした秘密の暗号を読み解いていくものだ。ヒントになるのは、その絵の題名「七福神の内 毘沙門」である。

美人は毘沙門天？

一人の女性の立ち姿を中心に左手に三点の鉢植がならぶこの絵は、背景は省略されているものの、芸妓かと思われ女性の日常の二マを描写したものと見える。ただし、本図は先の題名の通り、七福神を模して七枚二揃えで制作された連作のうちの毘沙門天に相当する絵となる（国立国会図書館のデータベースでは全作品を公開）。それを示すとおり、上部に記された戯作者、柳下亭種員（りゅうかてい・たねかず）のこの女性のことを記す文章には、「金杉の毘沙門様へ朝参り」や、「偽通者（なまぎき）を速疾鬼（そくしつき）のごとく踏つけ」とあり、当時参詣の人々で大いに賑わっていた芝金杉（東京都港区）の毘沙門堂（正伝寺）と毘沙門天が足で踏みつけている悪鬼を引き合いに出して、この絵を毘沙門天と結びつけている。



本図の絵とことばのうち、ことばはこのように毘沙門天を指し示している。それでは、この絵は日常の光景を借りて、いったいどのようにそれを暗示しようとしているのだろうか。絵師が私たちに問いかけている謎に、ここでは本物の毘沙門天像の助けを借りて挑戦していこう。

絵に隠された毘沙門天のコード

比較する写真は、東大寺金堂の「多聞天」像である。多聞天とは、仏像の周囲で四天王像として安置する場合の名称で、独尊像では毘沙門天と呼ばれている。浮世絵のどこかに、この像と共通する要素、あるいは暗示するような要素が隠されている。

まず、浮世絵の女性は、左手に四段式の蓋物を掲げ持っている。このポーズ、まるで東大寺の像と同様で、毘沙門天像が掲げる「宝塔（ほうとう・仏舍利を安置する塔）」の見立てとなっている。そして取り替えられた宝塔はといえば、女性の着物の袖口と肩口にしっかりと紋様となつて

その場を与えられているのである。実は着物にはもう一つのヒントがある。その地紋をよく見ると、毘沙門天（多聞天）像の腹部および腿の部分の鎧（よろい）の紋様とまったく同じだということがわかる。亀甲文様が変化したこの文様は、特に毘沙門天の鎧（よろい）の鎖として描かれたために「毘沙門亀甲文」と呼ばれる、毘沙門天に特有の意匠なのである。他にもこの文様が描かれている図像がある。あたかも女性の日常生活の傍らにありそうで、しかし意味ありげにこの絵に描きこまれている、他ならぬ鉢植の図である。植物の種類としては非常に珍しく瓢箪が植えられた柴付鉢の文様に、同じ毘沙門亀甲があらわられているのである。また他にも、女性の鬘を結う赤い帯が見えるが、これも毘沙門天の結い髪と同様の形と見える（東大寺の写真では冠で隠れている）。

ここまで東大寺の像との比較から、宝塔、それを掲げるようなポーズ、毘沙門亀甲文、結い髪と、4つの共通する要素を発見できた。しかし毘沙門天像に見られる特有の持物はまだ他にもある。左手に持つ三又の鉢である。ここで見逃してはならない浮世絵師の手の込んだ細工を発見できるだろうか——そう、先ほど見た毘沙門亀甲文鉢の瓢箪が伸ばす蔓、その絡みつく支柱が、なんと三又の鉢の形状に描かれているのである。以上のように毘沙門天を暗示するいくつもの図像の共通点から、この絵が単なる日常の女性の姿ではなく、日常を装った毘沙門天の見立絵という事実が明らかとなった。それにしても手の込んだ細工がこの絵に込められているのだが、またさらに複雑な絵師の問いかけが、この意味ありげと言った瓢箪の鉢植から次第に明らかになってくるのである。

「ふ（富・福）」尽くしの図

この絵のもう一つの主要構造は、他ならぬ毘沙門天が七福神の一人、つまりは福の神という一点に起因する。先月号

でも紹介した富や福に通じる「ふ」から始まるおめでたいものごとが、これらの図像に共通して貫かれているのである。

鉢植にされた瓢箪、これは別名「ふくべ」とも呼び、縁起物の一つとされる。鉢植の植物は他に、縞文の「袋式（ふくろしき）」の鉢に「双葉葵（ふたばあおい）」、そして奥には松葉蘭——これは別名「富貴草（ふうきくさ）」と呼ばれている。このように見えてくると、女性が掲げる毘沙門天の宝塔の見立てとなったものは「蓋物（ふたもの）」

で、「文（ふみ）」が結ばれている。そして女性は右手を「懐（ふところ）」に差し込むといったように、モノだけではなく仕種にも「ふ」が共通しているのである（この部分の読み解きは、日野原健司、平野恵「浮世絵でめぐる江戸の花 見て楽しむ園芸文化（誠文堂新光社、2013年）」より、当該図版における平野氏の解説を参照）。

絵師が問いかけた江戸時代の謎かけに、現代の我々は毘沙門天像の助けを借りてようやく及第点に辿り着けそうだ。きつと同時代の受け手たちも、実際に金杉の毘沙

門堂で見えてきた知識を寄せ集め、この絵の読み解きを楽しんだことだろう。生きた絵の居場所に、少しは我々も近づきことができただろうか。（続く）

著者プロフィール

田口文哉（たぐち・ふみや）
さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。
1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究所博士後期課程修了 芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。



三代 歌川豊国《誹諧七福神之内 毘沙門》
大判錦絵 37.5×25.6cm 弘化4～嘉永3年（1847～1850）
版元／佐野屋喜兵衛 個人蔵

浮世絵師紹介
三代 歌川豊国（さんだい うたがわとよくに） 天明6～元治元年（1786～1864）
数多い浮世絵師のなかでも最大級の作例を残した江戸時代末期の絵師。庶民が鉢植を楽しむようになる時代に活躍した浮世絵師であり、多くの鉢植が彼の浮世絵版画に描きあらわされている。

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知
■「さつき盆栽展 皇花 磯部繁男個展」
概要：さいたま市のさつき盆栽作家・磯部繁男氏の個展として、見頃を迎えたさつき盆栽の数々で会場を華やかに彩ります。
会期：平成25年6月7日(金)～6月16日(日) 毎週木曜休館
主催：さいたま市大宮盆栽美術館
会場：コレクションギャラリー、企画展示室
■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091